大阪市老人クラブ徽章

全国３大運動
健康・友愛・奉仕をめざして
市内全会員に配布

月刊 大老連

平成27年　8月号
第685号　毎月１日発行
平成27年（2015年）８月１日
定価30円（送料別）　年間購読料1,100円（送料共）
購読お申し込みは、月刊大老連編集室にご連絡ください。

昭和33年９月19日第三種郵便物認可
〒543-0021
大阪市天王寺区東高津町12-10
大阪市立社会福祉センター３階
発行所　一般社団法人 大阪市老人クラブ連合会
電　話　事務局 06(4304)8555
編集室 06(4304)8556
ＦＡＸ　06(4304)8557

近畿ブロック老人クラブリーダー研修会

288名が参加して盛大に開催

滋賀県

「のばそう！健康寿命、担おう！地域づくりを」をメインテーマに、平成27年度近畿ブロック老人クラブリーダー研修会が、６月11日（木）～12日（金）の両日、滋賀県４指定都市から老人クラブリーダー288名が参加する中で、大老連からは6府県4指定都市から老人クラブリーダー288名が参加して、真剣かつ熱心に研修に取り組みました。中保昌理事長をはじめ17名が参加して、真剣かつ熱心に研修に取り組みました。

第1日目の開会式では、大老連理事長である中保昌近畿老人クラブ連絡協議会会長から「わが国の人口の高齢化は加速しており、今後の高齢社会をより豊かで充実したものにするためには、老人クラブの果たす役割はますます高まっている中で、近畿ブロック老連のリーダーが一堂に会し、老人クラブの抱える課題について研究討議を深め、情報交換を行うこのような機会は極めて重要であり、有意義な研修会となるよう祈念いたします」とのあいさつがありました。

開会のあいさつをする中保昌近畿老人クラブ連絡協議会会長

続いて、三日月大造滋賀県知事（瀬古隆部次長代読）、渡邉光春滋賀県社会福祉協議会会長（小林治一良滋賀県社会福祉協議会副会長代読）からそれぞれ来賓祝辞がありました。

次に、齊藤秀樹全老連常務理事から「老人クラブとしての運動・行動提案―社会情勢を踏まえて―」と題して、老人クラブ「100万人会員増強運動」の推進、新地域支援事業に向けての行動提案、高齢消費者被害防止などについてのお話がありました。

続いて、4つの分科会に分かれて研究討議が行われ、事例発表に基づく意見交換が活発かつ熱心に行われました。その中で、第1分科会では鶴見区の永田節子女性部長が事例発表を行いますとともに、第4分科会では東住吉区の新田辰次副会長が座長を務めました。4つの分科会のテーマは次のとおりです。

▽第1分科会「健康寿命をのばす健康づくり・介護予防活動」の推進

▽第2分科会「暮らしの安心を支え合う友愛活動」の推進

▽第3分科会「他世代や関係団体と連携した地域づくり活動」の推進

▽第4分科会「会員加入促進に向けた仲間づくり活動」の推進

第１分科会で事例発表をする永田節子鶴見区老連女性部長

第４分科会で座長を務める新田辰次東住吉区老連副会長

第2日目は、いきいきクラブ体操でスタートし、元滋賀県知事の國松善次氏から「100歳人生を考える」と題して、親しみやすい口調で心に残る貴重なお話があり、会場は熱気に包まれました。

次に、全体会議として、神戸市老連理事長の大辻正忠近老協副会長の座長のもと、それぞれの分科会において討議された内容を各分科会の代表から報告されるとともに、中近老協会長からは「今回の研修会は、今後の老人クラブ活動の発展と高齢者福祉の向上を図るうえで、非常に実り多い内容でありました」との総括的な講評が行われました。

最後に、開催地である北沢浩治滋賀県老連会長のお礼のあいさつに続いて、次回開催地である槙枝正昭京都市老連会長のあいさつがあり、遠藤吉貞近老協副会長からの閉会のあいさつで、2日間にわたる研修会を盛会裡に終了しました。

参加者全員でいきいきクラブ体操

講演する國松善次元滋賀県知事

基調報告をする齊藤秀樹全老連常務理事

今後の主な事業予定

９月３日	大阪市高齢者福祉大会
９月29日	第54回大老連供養塔法要
10月28日～29日	第44回全国老人クラブ大会（静岡県）
11月６日	第34回大老連ゲートボール大会
平成28年１月中旬	老人クラブ指導者・女性部指導者合同研修会
平成28年１月下旬	第４回大老連カラオケ大会

随意随想

これからの地域づくり

大阪市立大学非常勤講師　竹村　安子

先日、某区の有償活動サポーターの研修に参加させていただいた。

参加されたメンバーは12人で、有償活動に参加したきっかけは、約50％が地域活動やボランティア活動をしていたので参加したとのこと、後の50％は区役所や実施団体の募集の呼びかけで応募したということだった。年代は60歳以上の方が多く、男性も3人参加されていた。

そして、そこで気が付いたことは、多くの方が、親やパートナーの介護や看護の経験をされているということだった。

懇談になると、介護した親たちの心身の変化の様子などの体験談が飛び交ったが、その後、自分自身が高齢になって、介護・看護が必要になった時や、介護保険がこれからどうなっていくのかという、自分が今感じている問題や不安などの意見が出された。その中で、近隣関係が大事だ、コミュニティづくりを進めなければ、という意見もでてきた。皆さん「そうだ、そうだ…」と言いながら、「どこが進めてくれるのか」「町会の役員さんも高齢で、忙しい」「行政がもっと本腰をいれて取り組むことが必要だ…」などの意見が出た。

話を聞いていて、ふと頭をよぎったのは、高齢者支援の活動に関わっているボランティアや市民の多くが、介護・看護をした経験や、子供の時に高齢者と一緒に暮らしてきた人が多いということだ。

しかし、現在の65歳以降の人たちは、高齢者と一緒に生活したという人は少ない。40歳以降は極めて少なくなる。

高齢者と生活した経験のない人は、人間は高齢になると心身が衰え、今まで可能だったことが、徐々にできなくなっていったり、高齢になるほど親族や知人などの身近な人が、亡くなられたり、入院されたり、施設に入所されたり、子供さんの家に行かれたりなどで、いなくなっていく孤独や孤立感などを感じているということを理解できるだろうか…。

高齢者と子供・若者たちとの協働活動を考え、実践していかなければ、大変なことになるのではないかと、危機感が募った。

を利用してくださいと、厚生労働省では計画しているが、本当にこの短期間に、そのような活動が生まれてくるのか、はなはだ疑問と言わざるを得ない。

私は自宅のすぐ近くに、築80年以上の長屋の古民家（広さは約11坪）

しないでやっておられる。活動者を募っても「私はサロンに来て楽しみたいだけで、世話人になるのは嫌です」と断られることも多い。

細々と活動しているが、このような状態で要支援の方々をサロンに受け入れることができて週2回ほど、サロンを主宰しているが、世話人や小物づくり・笑いヨガなどのプログラムの講師の方々全員がボランティアで、交通費や報酬などは全く出していない。しかも、大半が70歳前後の方たちで、活動を楽しみながら無理できるかどうか、はなはだ心もとない。

もっと、60歳以下の方や若い人たちが参画して欲しいと思っているが、それらの人たちの多くは、仕事で忙しく、平日の活動をするのは難しい。

60歳以下の方や若者、子供たちが活動に参加できる仕掛けが、これからの超高齢社会を考えていくうえで、必要だと思う。

1・2か月前にテレビでデンマークの取り組みをみた。デンマークでは、会社に勤めている人が、勤務時間内に高齢者の話し相手や、外出介助などのボランティア活動をしていることである。これからの日本でもそのようなことを考えていく必要があるのではないか。

10年後には、団塊の世代といわれる、第一次ベビーブームの人たちが75歳以上の後期高齢者となる。それに備えてという訳ではないが、人と人とのつながりが薄くなってしまった地域社会で、見守り・助け合い・サロン活動などの住民・市民活動が誕生していくように努力することが重要だ。

不安はいっぱいだが、「賽は投げられた」わけであり、昨年の流行語では「いつやるのか？「今でしょう!!」と、まず老人クラブなどの地域団体や福祉関係者は、理解者を増やし、できる活動にぼちぼち取り組んでいき、10年後に向けて、地域力を醸成し、「無縁社会」が「有縁社会」になっていくような生活支援サービスが、地域を創っていくきっかけになればと願っている。